

2017年11月2日(木)

日本工業倶楽部会報原稿

高校では道徳教育ではなく、哲学教育を—ユネスコ世界哲学の日（11月第3木曜日）に考える—

開倫塾

塾長 林明夫

従来、小中学校で行われていた道徳の時間が、2018年度以降、順次、「特別の教科 道徳」（道徳科）となり、高校でも、2022年以降、道徳が「教科」として教えられるようです。

確かに、人間として行っていいことと、行ってはならないことを、自分の力で考えるうえで、小学校や中学校での道徳教育は必要かもしれません。

しかし、高校生にとって、教科としての道徳教育が必要かといえば、他に行うべきことがあると考えます。それは、「教科としての哲学」です。

現代社会の課題は多岐にわたり、最先端の科学技術の急激発展、多様な価値観、発展途上国における人口爆発に伴う貧富の格差拡大、気候変動に基づく大規模自然災害の頻発、世界各地で多発するテロなど、物事の本質を自分の力で考え、意思決定をし、自己責任、自助努力で自律的に行動し続けなければならない時代に入りました。

このような時代を生き抜くのに欠かせないのは、一つ一つのものごとの大切さ、つまり、「価値」を認識し、その中に「意味」を見出したうえで、自分の力で「意味付け」を行い、なすべきことと、しないことを自己決定。自律的に行動すること、「秩序」に基づき行動することと考えます。

このような「価値」「意味」「秩序」という哲学的な思考と行動が求められているのが、現代社会と考えます。

確かに、高校の倫理・社会科では、現代社会の課題から始まって、世界と日本の思想の代表的な考えが教えられておりますが、本格的な哲学教育の基礎は日本では教育されていません。

高校生に哲学は難しすぎるのではないかとの考えもあるかもしれません。しかし、幼稚園児のための哲学教育のドキュメンタリー、フランス映画「子供の哲学」などを見ますと、哲学教育を含め、教育は、先生の熱情と創意工夫次第だとの感を深くします。

例えば、フランスでは、高校教育の総仕上げは哲学であるとの考えのもとに、高校3年生では、理系でも週4時間、文系では週8時間の哲学の授業があります。

フランスでは、大学入学資格試験にも哲学の論文試験ないし、重要文献に注釈をつける筆記試験が課されるようです。

高校では、倫理と哲学を必修にして、思想史は倫理で学び、哲学の基本的なテーマについては、倫理の授業で得た代表的な思想の知識を踏まえて、哲学の授業で学び、高校教育を終えるべきと考えます。

かつて、フランスでは、高校最終学年の哲学の授業は、高校のある地域の最高の知識人が担当するものとされ、高校の哲学の先生は極めて高い評価を得ていたそうです。

現在、日本の高校生が使用している「倫理」の教科書は、極めてよくまとめられた上に、わかりやすく、レベルが高い、世界最高水準の「思想史」のテキストと確信します。

お試しに、社会人用の高校教科書シリーズの、小寺聡編「もういちど読む 山川 倫理」山川出版刊を、小寺聡編「倫理用語集」山川出版刊を参考にしながら、ご興味のあるところだけでも通読なさることをお勧めいたします。

そのうえで、フランスのかつての代表的な高校哲学科のテキスト、ポール・フルキエ著「哲学講義（全4巻）」を、ちくま学芸文庫、筑摩書房刊でお手に取り、ぜひ、取り上げられている項目だけでもご一読ください。

日本の高校教育、とりわけ、普通科高校での教育の最大の課題は、大学教育や、社会に出る前に高校教育として学ぶべき教科を十分に学ぶことなく、また、学んだことを身に着けることなく、高校を卒業させることです。

大学入試の合格を高校教育の目的にしている高校が多く、大学入試に出題されない教科や、分野は、十分な教育を行わない高校が大半であることです。

文学部、法学部、政治学部、経済学部、商学部、国際学部、教育学部、グローバル学部などの文系学科では、日本史、世界史、地理はもとより、高校の「倫理」の知識も必要不可欠であるにもかかわらず、大学入試の受験科目として必要ない場合には、全くといってよいほど学ばない、学ばせないのが、現代の高校です。

製造業、医療や福祉、介護の専門職につく高校生に、生物、物理、化学、地学のすべて履修させない、数学Ⅲの微分・積分まで履修させないのは、教育の放棄といっても過言ではありません。

出席日数さえ足りていれば、成績の評価は甘く、留年はほとんどない。厳格な評価とは程遠いのが、日本の高校です。

安倍首相は、高校教育の無償化を叫んでおりますが、無償化の前に行うべきことがあります。それは、

高校への哲学教育導入と、厳格な評価、高校の1クラス定員数の半減と、現在の高校教員の修士課程取得などによる、高校の質的向上です。

もしも、仮に、高校に教科としての道德教育を導入するとしても、道德を語るなら、四書、つまり、論語、孟子、大学、中庸など儒教と、老子や荘子など道教の思想の教育は避けられません。

中国の儒教や道教だけでは、足りません。高校で道德を指導する先生は、少なくとも、高校倫理の教科書で紹介されている著作はすべて熟読玩味し、理解し、生徒に教えられるレベルにまで到達していなければなりません。

先ほどお示した、フランスの高校哲学の教科書程度は、確実に身に付けておかなければ、高校道德の授業は、単なる、思い付きのレベルにとどまるといえます。

「教育とは、要するに、全人類が進化してきた現在の水準まで、後世を引き上げてやる手伝いをする事である。言い換えれば、個体が系統発生を繰り返すに助力することにある。もしこういう助手の存在意義を軽視して、全く独自の力でやろうとすれば、大きな時間と精力のロスになる」以上、宮崎市定著「現代語訳論語」岩波現代文庫、岩波書店 2000年5月16日刊 29ページより引用。

道德や倫理、哲学を、教科として本格的に、本質に迫る形で、高校生に指導するなら、他の教科の教員と同様、大学だけでは足りず、大学院修士課程、できれば、博士課程修了レベルの学力が、教員として必要と考えます。

先進諸国のみならず、新興諸国でも、小学校を含め、学校で指導する教員は、大学院修士課程以上を資格要件にする国が激増しています。日本でも、現職教員の大学院での修士号取得を促進すべきと考えます。少なくとも、新任の採用は、修士以上に限るべきです。高校の校長には、博士号を求めべきです。

日本の高校は1クラス30名以上が多いようですが、OECD諸国では15名くらいのクラスが多いようです。今後、日本でも、対話型、議論中心のゼミ型授業を、高校でも目指すのであれば、1クラス平均人数は20名を目指すべきです。

国の競争力は、教育の質で決定されます。大学だけでなく、高校の評価もより厳格化し、1教科でも最低点数に満たない高校生は、高校を中退させるのではなく、3年半、4年間、5年間など再履修や長期在学も制度として整備し、奨励すべきです。

人生において、高校での教育ほど大切なものはありません。高校での教育内容が十分身につけていないと、大学の教育や研究にも耐えられませんし、社会に出て、仕事や社会的な活動をする時にも、豊かで充実した人生を送る時にも、高校での勉強は必要不可欠だからです。

もし、高校で倫理や哲学の基礎を学ばない場合は、大学で履修しない限り、倫理や哲学を学ばずに貴

重な人生を過ごすこととなります。

道徳の基礎的な勉強は中学までに済ませ、高校では、倫理とともに、哲学を教科として学ぶことを、ここにご提案いたします。

ちなみに、毎年11月第3木曜日は、ユネスコが定めた「世界哲学の日」です。本年2017年は、11月16日が11月第3木曜日、「世界哲学の日」です。「哲学なくして、ユネスコなし」でユネスコは活動しております。ご参考まで。

2017年11月2日（木）6時52分